

メープルレター（87）

シェフロイックとパティシエルカ

あー暑い、モントリオールにも地球温暖化はやってきたようです。高い湿度と温度でぐったりするような日が続くことひと月。やっと少し涼しくなりました。このまま秋になってしまうのかもしれませんが。と、昨日書き始めたのですが、昨夜から大雨です。冠水道路で立ち往生する車もかなりあるようです。

ミレイユ（友人の一人、元プロのケータリングサービス屋さん）から恒例の夏の木陰のランチの誘いがあり、さわやかな夏の日を過ごしたのは7月の下旬の事でした。ランチの集まりは、いけばなインターナショナルの新期のプログラムの決めるミーティングで始まりました。おばさんたちの（いや、男性の運営委員が一人いました）おしゃべりと議論はとどまることを知らず、

「そろそろ、ランチしましょう。3時半頃には雨が降るから。庭にはいられなくなるし、その頃に帰宅するようにしたらどうかしら。」

ミレイユは、さっさとシャンペンの用意をし始めました。運ばれてきたオードブルは色鮮やかな20種類ほどのおつまみと蓮のチップスでした。鴨のコンフィやスモークサーモンやヤギのチーズなどを取り合わせ、実に綺麗なオードブルがテーブル一杯に広がりました。さすが元プロのケータリングサービス屋さんです。オードブルをつまみながら、シャンペンのグラスの調子が上がっていきます。運転する人には早めに一杯だけで、後はレモンの輪切りと庭先のミントの葉がはいった冷たいお水だけです。

メインは七面鳥のローストの薄切り肉でした。マリネされ、かすかな隠し味を感じる微妙な味でした。小さな豆たちのサラダが付け合わせになっていました。ここで今度は白ワインに変わりました。そして最後の仕上げのデザートは近所の農園で取れたイチゴとイチゴのアイスクリームでした。折しも、雨雲が広がってきました。皆、慌てて帰り支

度です。時計をみれば3時15分。ここはセントローレンス河の北側（モンリオールはセントローレンス河が、北と南の二手に分かれる、中洲です。）の流れを挟んだもう一つの島、ラバル島です。モンリオールに戻るには少し時間がかかります。この島は、大きな家の立ち並ぶ住宅街や、花の栽培や果物や野菜を作る農園がたくさんあります。家が立ち並ぶのは一定の地区で、後はぼちぼちと農園がある大きな島です。この向こうには大河が湖のように更に広がっていきます。日本では考えられない川の大きさと空間です。

ミレイユはこのラバル島に住み長い月日がたちます。当時の典型的な若き娘のカトリックの教育を受け、修道院の寮で暮らし、看護婦となり、やがて、新しいキャリアを求め子供服の会社をたちあげ、次いでプロのケータリング屋になりました。好調だったケータリングの会社はご主人の介護のために人に譲り渡し、ご主人が無くなった後は、日本が好きだったご主人との思い出を大事にして、いけばなを始めました。80歳を過ぎた今も、元気にマイペースで暮らす日々です。彼女の庭にある何本かの大木の紅葉の落ち葉が絨毯のように庭を埋め尽くす頃になると、

「落ち葉拾いパーティーに来ない？」と家族など親戚一同に声をかけます。

「だって、主人がなくなって、一人ではとても落ち葉を拾い切れなかったから、そうだ、人の手を借りよう、と思いたって、めったに会わない従妹だの、親戚に連絡したのよね。落ち葉拾いパーティーをします。参加者を募っていますって。」

「すごいアイデア！！きっとお食事、アルコール付きなんでしょうねえ、集まりは。」

「勿論、勿論。お礼にお料理一杯用意して、皆でわいわい騒ぐのよ、落ち葉拾いの後のパーティーの料理のテーマは毎年変えるのよ。日本の酒だったり、オードブルからデザートまでマーフィンだったり。皆、遠くから何時間もかけてやってくるのよね。お互いの近況が聞けるし、皆、楽しみにしてるみたい。今年はどんなテーマにしようかしら？」

ご主人をなくした失意からでも何かを見つけ出す、起きあがりこぼしのような人です。

さてさて、義理の次男が7月始めにフレデリックトンからケベックに引っ越しました。家の中も片ずき、やっと人が呼べるようになったからと来ないかと誘いがあり、ドリトル先生と出かけていったのは8月始めのことです。この頃は、カナダ西海岸のジャスパーあたりの大規模な山火事の煙が気流に乗ってやってきて、毎日町中にスモッグがかかったようでした。ロッキーを越えて、山火事の煙はここまでやってくるのです。しかもこのころは、山火事でなくても燃えそうな、超暑い日々でした。次男から、

「電車で来ると楽かもしれない。駅まで迎えに行くから。」

とアドバイスがあったのですが、ドリトル先生は、

「しゃらくせー。僕は自分の車で好きな時に行って、好きな時に帰って来る。スーツケースをガラガラ引っ張って電車になんてのるものか。」

と、ケベックまでなら2時間半くらいだからと、軽ーい気持ちで車で出かけていきました。これが大きな間違いだったのです。ケベックに到着までの高速道路がやたら複雑でぐるぐる回り、目と鼻の先についても、曲がり方を間違えてまたもう二回りと、2時間半の予定が4時間かかってしまったのです。2時間半だから、特に飲み物も食べ物もいらないとマダム田中も高をくくっていました。やっと着いたときには腹ペコだったのです。

「ねえ、この2本のシャンペンとサンドイッチと交換しない？」

ドリトル先生は、飢えと渴きで疲れきり、息子に頼みこみ、チーズとプロシュートとパンの切れ端を出してもらって、やっと生き返ったのでした。

新しい家は、次男の勤務先の大学まで車で10分ほどの郊外にあります。綺麗な二階建て（大きな地下の部屋を入れると3階建てでしょうか）の家です。カナダの建築の特徴

で、夏涼しく、冬暖かい地下が、家の中では大事な場所になっています。サロンになったり、子供の遊び部屋になっていることが多いのです。次男ロイックの家では、息子の部屋とテレビを見る家族だんらんのリビングになっていました。バスルームとドレッシングルームもあります。ここだけで豪華なアパートと言えるスペースです。1階は、台所、食堂、お客様用リビングと家族用の小さなリビングがあります。2階には大きな寝室が二つと納戸のような小部屋があります。とても暮らしやすくできています。

この家の目玉商品は、この良くできた部屋構成ではなく、ガラッと外に出た時に目に入る、庭一杯に広がるどでかいプールです。プールに常に水が流れ落ちる壁があり、深さも2メートルはありそうです。ここで泳ぎ、その脇で食事ができるテラスがあり、庭の一角にはリビングセットもあります。美味しい食事の後はくつろげるようになってあります。テラスの脇の小さな生垣をのぞき込むとジャクジー風呂（ただいま故障中）があります。この豪華さ。飛行機に乗ってバカンスに行かなくても、ここでしっかりバカンスがすごせそうです。

プール脇のヒバの生垣をくぐりぬけると、ひっそりとした5本の紅葉の大木と3本のリンゴの木が立ち並ぶもう一つの庭が広がります。春はメープルシロップとり、秋はリンゴ狩りが出来そうです。こんなケッベク風の庭の風景も満喫できるようになっています。

さて、プロ並みの料理をする次男の夕食は、ドリトル先生の手土産のシャンペンとミル貝のオードブルで始まりました。メインは近所の魚屋で見繕ったマヒマヒ（シイラ、白身魚）のタルタル（細かく切った鱈のたたきのようなもの）でした。ハーブも微妙に刻みこみ、レモンもきいて実に美味でした。シェフロイックに拍手喝采でした。シャンペンのグラスが更に進みます。

デザートはロイックの15歳になる息子（ドリトル先生の孫）ルカの出番です。甘さを押さえ込んだテイミスの美味しいこと。プロパティシエも顔負けの出来栄えです。去年、フレデリックトンのジュニア料理コンテストに友達とチームを組んで参加し、準決勝まで進んだのもなるほどとうなずける素晴らしいデザートでした。こうして、精一杯の心使いと久々の再会で、招待された週末は楽しく、心地良く過ぎていきました。

来週はこのルカを4日間ほど預かることになっています。義理の次男が親友の結婚式の進行役（結婚式の正式な執行を進める。結婚届けのサインや儀式などを担当。サインした書類を政府に送付）をするため夫婦共々不在になります。結婚式前日の親族との会食、結婚式（湖に面した友人のシャレーの船着き桟橋で行う予定。誰も水に落ちないと良いですが。）とその後のカクテルパーティーなどのため、シャレー付近のホテルに泊まることになっています。もう一人の娘は、主人の元妻（次男の母親）が預かることになっているのですが。。

「私も少しだけでいいから一緒にいられないかしら。気分転換がしたい。」

と孫娘から交渉がはいり、半日だけ、孫娘も預かる羽目になってしまいました。ドリトル先生は一切面倒をみませんので、孫娘も私の肩にかかるとは。。。ルカの面倒は、娘に少し手伝ってもらうことになっています。いずれにしろ、忙しくなりそうです。

そうそう、ルカの滞在中に娘たち一家も呼んで、少し遅めのドリトル先生の79歳の誕生日祝いをしようと思っています。